

第22回「教育セミナー」 2019年2月24日（土）開催

◆ シンポジウム

テーマ 『学習指導要領の全面実施に向けた

各学校の取組について』

◆ シンポジスト

北 俊夫 先生 (前国士舘大学 教授)

後藤 良秀 先生 (東京都町田市立鶴川第二小学校 校長)

高橋 美香 先生 (東京都荒川区立尾久第六小学校 校長)

◆ コーディネーター

清水 静海 先生 (帝京大学 教授)



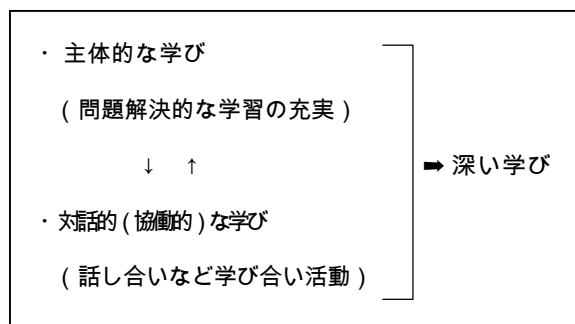
新学習指導要領実施に向けての課題につき、4人の先生方が熱い議論を交わされました。盛り沢山な内容から、要点を紹介します。

課題1 新しい授業づくりは、どう進めたらよいか。

清水： 今回の改訂を議論することは、成熟社会における教育をどうつくっていくかという、今後10年20年と続いていく教育の在り方を考える通過点と捉えたい。

最初のテーマは、授業改善のポイントとなっている「主体的・対話的で深い学びの実現」。まず、北先生からご提案をいただきます。

北： 「主体的・対話的で深い学び」は、当初「アクティブ・ラーニング」と呼ばれていたが、学習指導要領に示される際に、今のように言葉を変えた。これは、単に「アクティブ＝活動的」に児童が取り組みばよいのではなく、「ラーニング＝学習」として成立させることが必要だというメッセージ。授業を通し、資質・能力が子供に実現されなくてはならない。そのために必要なものが3つあるということ。



①「主体的な学び」子供主体の授業づくり＝主体的に目的意識をもって問題解決的学習を行う過程で、深まりのある学習ができる。

②「対話的な学び」みんなでよりよい考えを作るための対話的（協働的）な学習を通し、学びを深める。

③「深い学び」①と②の相乗的な効果により、更に学びが深まる。

以上を踏まえると、授業改善のポイントは、

①「主体的な学び」各教科等の特徴を踏まえて、問題解決的学習を更に充実・発展させる。

- ・ 単元全体など、先を見通した、より大きな問題意識をもたせる工夫。

- ・ 問題解決の見通しをもたせる指導の工夫

- ・ 学習の振り返り、学習成果のまとめの在り方

②「対話的な学び」話し合い活動では、発言のやりとりを重視する。

- ・ 発言、発表など伝え合いで終わらずに、発言のやりとり（討論や議論）を通して考えを深める学び合い。

③「深い学び」学習のプロセスを時間軸で捉える。

- ・ 子供自身が、学習を通して「はじめの理解」がどのように変容したか、成就感やこれからの課題、見通しをもてるようなまとめを大事にする。

最後に、なぜ「主体的・対話的で深い学び」による授業改善が求められているかを確認したい。簡単に要約すると、以下の2点がある。

① 思考力・判断力・表現力という力、学習に取り組む態度を育成するには、従来の知識伝達・技能伝達型の授業だけでは不足。

② これからの社会を生き抜く人を育てるために、授業も、将来の社会を見据える視点で変えなくてはならない。

清水：後藤先生、高橋先生から、それぞれの専門フィールドを反映させながら、今の提案にコメントや、質問をお願いします。

後藤：「主体的な学び・対話的な学び」について。多くの学校で授業を見ていると、子供が1人で考えたり、対話したりする時間は保障しているが、子供たちが自分の問題や目標としてのエネルギーをもった学びになっていないと思われる授業が多い。問題解決するだけでない、その問題や目標の子供たちにとっての意味付けについてご示唆いただきたい。

高橋：アクティブ・ラーニングと言われるようになる以前に「主体的・協働的な学び」という言葉があった。それが今回「主体的・対話的で深い学び」という形でまとめられた。これからの社会を生きる子供たちを育てるため、授業をアクティブに変えていく必要があることはその通りと思うが、「深い学び」は何をもって深い学びとするのか。学習内容について理解し、次の新しい学びの動機になることと捉えてよいのか。

北：「対話的な学習」として、1人で考え、次にグループで話し合い、最後に全体に出し合うという、形が先行した学習形態が展開されている例が多い。何のために話し合うのか、その問題意識を教師がもつと同時に、子供自身もきちんとおおくこと、また、もたせる手立てをすることが必要である。学習を子供自身がつくっていく、そのつくる一つの形態として、みんなで学び合う姿が見られるようになることが大事。

北：「深い学び」を動的なものとして捉えたい。時間軸による変容という視点が大切。1時間だけでなく単元、学年全体でも、他教科との関連の中でも変容は捉えることができる。従って、「深い学び」をどう作るかは、カリキュラム・マネジメントと大きな関わりがある。



清水：北先生のコメントを含めながら、新学習指導要領全面実施に向けた学校での実際の状況、課題、将来展望などについてお話をいただきたい。

高橋：新学習指導要領の全面実施に向けた授業の在り方については、校内研究を中心に研修を深めている。同時に、多くの学校で若手教員が増えていることから、基礎的授業力を身に付けさせることにも取り組んでいる。

後藤：新学習指導要領の理念は分かるが、現実の授業に落とし込めるまで少し時間が必要。研究開発校として取り組んだが、若くてもベテランでも授業改革、授業革新が求められる。新しい視点をもった授業を考えていかないと、「主体的・対話的で深い学び」は理想論で終わってしまう。

清水：新しい授業の方向を模索すると同時に、若い先生を中心に授業力それ自体を問わなくてはならない現状もあり、そこに若干の溝が開いている。これをどう近づけたらよいか。

北：若い先生方は、まず、授業とは何かという授業の基礎基本、不易に当たる部分をきちんと学ぶことが必要。そこから新たなチャレンジのできる応用力がついてくる。

清水：私から、今の授業づくりに関連して、3つのポイントをお話したい。

①「深い学び」に関しては、北先生が強調されたように、変容を広い視野から見ること。

これを象徴するのが「見方・考え方を働かせる」という言葉。学びを通していかに成長を促すか、成長という視点で見ようということ。「見方・考え方」は「論点整理」には「深い学び」の説明に入っていなかったが、答申で入ったことは参考になるのではないか。

② 高橋先生からご指摘があったように、はじめは、「主体的・協働的な学び＝アクティブ・ラーニング」だったが、言葉が変わった。それでは「協働的学び」はどこに行ったのか。実は、今回の改訂の根本に、「自立・協働・創造」があり、ここに「協働」が入っている。「対話」と「協働」は、本質はよく似ているが、切り口が違い、すみ分けがされた。

「論点整理」では「学びの過程、プロセス」と書いてあったのが、答申では「学び」となった。これは学習の成果と学習の過程の、両方を重視しましょうということ。この視点に気を付けて、授業改善を進めていってほしい。



課題2 カリキュラム・マネジメントをどう実施したらよいか。

清水：授業改善を図る上で、今回はカリキュラム・マネジメントが強調され、次の3つの大きな柱で提案されている。①教科横断的な取り組み。②PDCAサイクルでの教育課程改善。③プラン実施に当たっての人的・物的な協力確保による教育の質の向上と、そのためのマネジメント。

では、それぞれの学校で取り組まれた事例を基にご提案いただきます。

後藤：現任校に校長として着任以来8年間取り組んできた中から取組を紹介したい。研究開発学校の研究でもあるが、「どうやったら資質・能力を育成する学びに変えていけるか」ということが私のテーマ。

育てる能力を「論理的思考力」と最初に定め、各教科を、内容ではなく能力に注目してリンクさせた。

教育課程をつなぐだけでは運用できないので、学校経営的視点から、いろいろなマネジメントを同時進行で行った。

論理的思考力を育てることはどの教科でも行うが、その際、本校では、全ての授業で共通した「思考のすべ」というものを使う手法をとった。具体的には、比較、分類、関連付けなどのキーワードがついたシールやマグネットを作り、各教科の考える場面で使用した。

しかし、実際にやってみると、これだけでは教師主導にならざるを得ない。そこで、子供がやりたい学びを子供の目標や問題として作るには何が必要かを考え、「21世紀スキル科」という独自教科を設置した。

この教科の特徴は、「メタ認知力」「適応的学習力」を身に付けさせる点にある。メタ認知力とは、[メタ認知=客観的に自分を見てコントロールする能力]をさらに進めた、自ら計画を立てて実行する力で、中心的な手法は「プランニング」と「モニタリング」。適応的学習力とは、この力をいろいろなところで使える力を指す。これらの力が論理的思考力に加われれば、「主体的・協働的な学び」ができるようになるのではないかと仮説を立てて取り組んだ。

3年間の実践から、思考力や主体性は学び方により変わるという結論を出した。思考力や主体性は放っておいても身に付くものではなく、それを生み出す経験やスキルを、事前に育てておく必要がある。

高橋：カリキュラム・マネジメント3つ目の柱に当たる「環境整備」の取組として、私の学校で行った、外国語活動の増への対応を紹介したい。

背景として、本校は文科省の英語教育強化地域拠点事業の拠点校として小・中・高を接続した指導の在り方について研究した経緯がある。そこで得られた知見から、特に高学年の英語科につき、いわゆるモジュール学習の研究を先進的に進め、今年度は週3時間の短時間学習を行っている。

最も苦慮したのは、1単位時間の指導との関連に配慮した指導計画を作成すること。区独自のタブレット教材やその他の教材を総合的にまとめて作成した。

よく質問を受けるのは、本当に15分で実施できるのかという点。細かい話だが、チャイムを鳴らす時間について、様々な検証を重ねて決めた。

こうした取組の実施で非常に重要なのは、人的サポート、保護者の協力と理解を得ることと認識している。この点では、公開授業が効果的だった実感がある。

この他、校内でも指導法の研修を重ね、よりよい実施ができるよう取り組んでいる。

清水：2つの実践の発表で、北先生から聞きたいことがありましたら。

北：2つの発表は、これからの学校が直面するであろう課題に対して先導的、先進的に取り組まれたなど実感した。

カリキュラム・マネジメントは、「教科横断的」と学習指導要領にもあることから、比較的横軸で捉えられる傾向が強いが、併せて、教科内や学年間など、縦断的に捉える視点も必要。特に、提案があった「思考力、判断力、表現力」は、一教科に閉じこもるのではなく、いろいろな教科で意識しながら指導していくことで、「思考力、判断力、表現力」という汎用性の

高い能力が身に付いていく。この点もカリキュラム・マネジメントが求められている背景にある。そこで、2つの質問がある。

- ・横断的・縦断的な指導を意図的に行うには、そのことを指導計画や指導案に「見える化」しておくのがよいが、そのための校内での共通理解や意識的な指導の工夫について、何か知恵があれば。
- ・各教科の年間授業時間数は変わらない中、「主体的・対話的で深い学び」といった指導方法や「見方・考え方」といった時間のかかる指導方法が求められている一方、扱うべき内容は、増えこそすれ少なくなっていない。この3極をどうマネジメント・一体化してゆけばよいか、校内の先生にどう指導しているか。

清水：教師、児童のネットワークをどう張っていくか。各教科で汎用性の高い資質・能力を、計画の中に、どう「見える化」するか。時間のかかることが求められているが、限られた時間の中でどう実現するかなど、現場の感覚でお聞きかせください。



高橋：縦断的あるいは横断的などところについては、各年度の年間指導計画を作成する際、教科間等の関連を見える化していくのがよいと考える。具体的に明示することで共有化でき、改善もしやすい。

資質・能力等の「見える化」については、ご指摘通り、時間のかかる指導法が求められている一方で内容は減っていない、どうカリキュラム・マネジメントしていくかという点が、まさにキモ。この点については、この会のようなところで、教員自身が学びを深めていくのが不可欠。こういった内容が、若手教員にも分かるように理念も含めてかみ砕いて伝えられ、理念も含めて伝えてもらえることはありがたい。

後藤：ネットワーク化については、集約する場所がベースとなる「自分づくり型」と「協働プロジェクト型」の2つに、全ての教科でターゲットを向けた。学習指導要領では、その役割を担うのは総合や特活という書き方をしているので、集約するものを決めておき、そこにつなげていく。関連する内容の知識的な側面をつなぐだけでは限界がある。

「見える化」については、本校では全教科を通じて指導案の形を統一している。それを先ほど報告したシールの「比較・分類・関連付け・見通し・振り返り」の5つのキーワードで整理することで共有している。教師が互いに分かるようにするだけでなく、保護者や子供にも同様の示し方をする。

時間数の問題については、圧縮するしかない。軽重をつけることで、問題解決的、目標実現的など必要な場面では時間をたっぷりとれるよう組み立てる。また、時には教師主導できちんとさせる時間も必要だと考えている。

清水：お二人の話を踏まえ、北先生から、カリキュラム・マネジメントを進める上での留意点を。

北：カリキュラム・マネジメントを進めるには、先生が自分の学年、教科だけで考えていては実現しない。若い先生方も含め、全ての先生が、学校の運営を担っている一員として、教育課程という視点から全体を見渡す感覚が必要。また、三極を一体化する点については、やはり重点化、精選化するしかない。

その一方で、現場からは、テストや国の実施する学力検査がある以上は軽く扱うものを作るのも、との声があることも確か。ここについては、学力調査の在り方も含め、再検討する時期に来ているのではないかと。

フロアーからの意見・感想

A 後藤先生の取組が具体的で刺激を受けた。能力の焦点化についてお聞きしたい。能力のプランニング、モニタリング、自己評価は、子供にもできると思うが、子供たちにとって、能力の焦点化ということはどういうことを指しているのか。

B 後藤先生の説明で、カリキュラムを能力でつないだということが印象に残った。本校では内容でつなぐという考え方が多いので、能力でつなぐにはどうしたらよいのか。教科がまたがったり学年が違ったりする中でどのように焦点化したのか。

後藤：能力については、「思考力」「主体性」「協調性」の3本の柱を立て、それぞれ「何ができることが能力なのか」を、子供に分かる表現で伝えている。



例えば、思考力の中の能力であれば、「目標を決める」「見通しをもつ」「計画を立てる」など。これらを年度の最初に子供たちと話し合い、学級全体の目標をつくる。そして、各単元では、どの能力をどう伸ばしたいか子供に問いかけたり、教師の側から提示したりして話し合い、能力を抽出する。

評価では、この能力ができたかどうかを子供の基準にさせる。従って、「全員ここまでできなければ」というものは、ない。単元を通してどのように変容したかを振り返り、頑張ったこんな力がついた、というプラス志向の面で連携し絶対評価する。

清水：子供に焦点化する機会を与えるというのは、具体的にはどうするのか。

後藤：そこでは自分を見つめなくてはならない。自分が何をどこまでできていて、何が苦手かなどの自覚をさせ、だからこの目標にする、というふうに根拠をもって目標設定させる。また、その根拠を書かせたり話させたりして確認をとっている。

清水：英語を窓口にした、国語もそうだが、資質・能力を下支えする能力としての言語力を学校挙げて取り組んでいくには、どのようなことに留意・配慮しているか。

高橋：日頃の授業を中心に、一つ一つ丁寧にやっていくことが言語能力を高めると考えている。

清水：算数・数学も広く捉えると言語であり、言語能力を高めて、思ったこと考えたことを表現し、新たな問いを広げていくこともカリキュラム・マネジメントの大事なポイントとして位置付けたい。

課題3 これからの学習評価をどう進めるか

北：1月下旬に学習評価に関する取りまとめが報告された。これまでの考え方が維持される部分と、発想を少し変えるべき部分がある。ポイントは次の3点。

① 学習評価の目的が再確認されたこと。

評価には、伝達機能、管理機能、指導機能があるが、小学校の立場で重要なのは3つめ。従来は記録に残し確かな評価をすることに目が行きがちだったが、子供の学習改善と教師の指導改善の両方に生かすべきことが強調されている。

② 新しい学習指導要領との関連が重視されていること。

各教科の目標構成要素と評価の観点是一体である。従って、教科によっては、かなり発想を変えながら評価をすることが必要となる。

特に「思考・判断・表現」の観点については、「思考する」「判断する」「表現する」といった活動を評価する傾向があったが、そうではなく、それらの力が身に付いたか評価すると書かれている。こういった、目に見えない能力をどう評価するか。評価方法の研究・開発が求められると共に、授業改善のポイントでもある。

③ 「主体的に学習に取り組む態度」の評価。

外見的な判断ではなく、子供の学習に対する自己調整の姿を捉える必要がある。そのためには、例えば、日常的に、教師が学習状況を子供に伝える必要がある。それに基づき、子供自身が、よりよい学習をしようと促される



こと。子供自身も、他の子供から評価を受けたり、自ら振り返って自己評価したりすることにより、子供が常に、自らの学習をよりよい方向に導こうとするような主体的な学習態度が育っているかを評価する。他の観点との関連も重要。

清水：今お話のあった評価を含めて、新しい授業づくりをどう進めていくかのまとめを。

後藤：評価について、3つめで出てきた自己調整は、メタ認知をすること。しかし、子供が自己コントロールしながら、それができているか自己制御するのは、言葉で言うほど簡単ではない。従来の授業の形を、目標を先に設定し、子供が目標と教科の内容を絡めて評価をしていくように変えていくことになると思う。今後、研究を進めていきたい。

高橋：評価の報告書では「主体的に学習に取り組む態度」に注目した。他の観点との関わりの中で評価するものであり、これだけ取り出して評価することはできない。それぞれの観点の評価の在り方について、現場でしっかり研修していく。

北：評価に関しては、短期的にペーパーテストなどで評価できる部分と、少し長い目で見て行かなくてはいけない部分があり、それぞれの評価方法は違って良い。思考力など目に見えない能力の評価は、場合によっては複数の単元を通し、少し長い目で子供の変容を見ることが大事。
評価計画に関しては、働き方改革が言われていることもあり、継続的にできるかを考えると、あまり細かいものは必要ない。

清水：授業は学び手の主体性と教え手の主体性の両方がある。そのバランスを考えた授業づくりが必要。評価基準が出されるので、参考にして計画を立ててほしい。先生方、少し先まで眺め、心身ともに留意しながら 授業改善を図ってください。



※本文中の肩書きは本シンポジウム開催時（H31.2.24）のもの です。